

Ⅲ. 情報パッケージ（試案）の作成

1. 情報パッケージの構想

予備的・準備的研究の成果を受けて、本研究で開発研究を行う情報パッケージの構想を検討した。情報パッケージに求めたい4つの意義について考察を行っている。

- (1) 「軸となる考え方」に基づいて整理した情報や知見をパッケージとして提案することの意義
- (2) 「手厚い支援を必要としている子ども」に焦点をあてることの意義
- (3) マニュアルではなく「考えることをサポートするツール」を目指すことの意義
- (4) 子どもに関わる関係者が「共有できるツール」を目指すことの意義

2. 情報パッケージ（試案）の作成

研究協力者、研究協力機関の協力のもと、情報パッケージ（試案）を作成した。ここでは試案の作成に先立って検討した事項を概観する。

- (1) 情報パッケージの項目と構成
- (2) 情報パッケージのコンセプトと通称
- (3) 情報パッケージのフォーマットの検討
- (4) 情報パッケージの解説及び資料に盛り込むべき内容

3. 情報パッケージ「ばれっと PALETTE」（試案）

上記を踏まえ、研究協力者、研究協力機関の協力のもと、情報パッケージ（試案）を作成した。資料2（別冊）を参照いただきたい。

1. 情報パッケージの構想

- (1) 「軸となる考え方」に基づいて整理した情報や知見をパッケージとして提案することの意義
- (2) 「手厚い支援を必要としている子ども」に焦点をあてることの意義
- (3) マニュアルではなく「考えることをサポートするツール」を目指すことの意義
- (4) 子どもに関わる関係者が「共有できるツール」を目指すことの意義

1. 情報パッケージの構想

予備的・準備的研究と位置づけられた平成24年度の専門研究D「重度・重複障害のある子どもの実態把握、教育目標・内容の設定、及び評価に関する研究～現在及び将来を支える教育計画とその実施に関する予備的研究～」では、まず、学校現場における課題の整理、及び、関連文献の収集と整理を行った。さらに、整理した情報に基づく研究チームメンバーでの議論を通して、情報パッケージに含む内容の項目案を作成した。項目案には訪問した数校の教員から得たフィードバックも反映することができた。さらに、情報パッケージの構成やコンセプト等について検討が進んだことは、大きな成果であった。

以下、予備的・準備的研究の成果を受けて、本研究で開発研究を行う情報パッケージの構想を検討する際に重視した、情報パッケージに求めたい3つの意義について述べる。

(1)「軸となる考え方」に基づいて整理した情報や知見をパッケージとして提案することの意義

重度・重複障害のある子どもの教育関連の文献は、すでに数多く出版されている。しかしながら、それぞれの文献の情報は断片的で、様々な領域からの支援を必要とする子どもの教育に総合的かつ具体的な提案ができるものは、これまでに日本にはみられなかった。

また、多くの学校現場にとって、実態把握、教育計画作成、学習内容と方法の決定と実施、評価と改善という、従来からある一連の学校教育活動を充実させることが課題となっているが、それに加えて、ICFやキャリア教育の視点をどのように織り込むのか、といった対応に多くのエネルギーを注いでいた。すなわち、保護者との連携、家庭や地域での生活、将来に向けた取組等の視点は、障害の重い子どもの教育にとっては古くて新しいテーマではあるが、それらを可視化できる形で、個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と実施に反映させようとしている学校現場の状況がある。

これらの状況を考えるとき、「軸となる考え方」に基づいて総合的に情報や知見を整理し、パッケージとして提案することの必要性を再認識した。この点について、欧米では、現場の教員にとって必要な具体的な情報を提供するツールが数多く開発されているが、特に重い障害のある子どもには、前述したように「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」の考え方が用いられている。上記の日本の教育現場の課題解決にあたっては、この考え方を軸として、情報パッケージの内容面・構成面を検討していきたいと考えた。

(2)「手厚い支援を必要としている子ども」に焦点をあてることの意義

この研究のタイトルの上では、対象が「重度・重複障害のある子ども」となっているが、学校現場では、いわゆる重度・重複障害のある子どものケースのみでなく、感覚障害と知的障害を重複しているケース、重い自閉症のケース等、障害の程度が比較的軽度で、学習や生活に様々な領域からの支援を必要としている子どもの教育への対応に関する課題が見

受けられた。そのような子どもは、肢体不自由を対象とする特別支援学校のみでなく、知的障害、視覚障害、聴覚障害、病弱、いずれの特別支援学校にも在籍することが考えられる。また、インクルーシブ教育システムの整備が進む状況において、今後、小・中学校等で学ぶ児童生徒のケースも増加することが予想される。

本研究で開発する情報パッケージは、特別支援学校の障害種別を超えて、あるいは、小・中学校等で学んでいる子どもも含めて、これらの「重い障害がある」と言われている子どもたちの教育に活用できるものとしたと考えた。これらの「重い障害がある子ども」のほとんどは、「ニーズ」の視点からみると、「複雑で多様なニーズのある子ども」である。さらに、共生社会に生きる「子ども」を主体にして考えると、「自立と社会参加をするために『手厚い支援を必要としている子ども』」であるといえる。このような検討を経て、この情報パッケージでは、活用の対象とする子どもについて、「手厚い支援を必要としている子ども」とした。

訪問した多くの学校では、手厚い支援を必要としている、重い障害がある子どものキャリア教育の検討課題として、「知的障害教育で行っていることの焼き直しではなく、重い障害のある子どものニーズに応えるものにするにはどうすればよいか。」が話題として挙がった。また「ICFの考え方を取り入れることによって教員、保護者、多職種等で話し合う基盤ができた。しかし、教育として何をすればよいかの答えが出るわけではない。改めて、重い障害のある子どもの教育の専門性を問い直す必要を感じた。」という声があった。この情報パッケージは、このような「『手厚い支援を必要としている子ども』」の教育に必要な専門性を改めて整理する」という意味でも、作成の意義がある。

（3）マニュアルではなく「考えることをサポートするツール」を目指すことの意義

資料1として添付した紀要論文「重複障害教育に携わる教員の専門性のあり方とその形成に関する一考察—複数の異なる障害種別学校を経験した教員へのインタビューを通して—」（齊藤他、2013）では、教員の専門性として2つの専門性の形が示唆された。すなわち、「知識・技術の学びによる累積型の専門性」と「子ども観・障害観・教育観を省察する深化型の専門性」である。従来の重度・重複障害のある子どもの教育関連の文献は、前者の「累積型の専門性」を高めることを目的としたものがほとんどであったと思われる。

学習や生活に様々な領域からの支援を必要としている子どもの障害の状況や生活・学習環境は千差万別であり、教員には、自身の教育実践を振り返りつつ、また、考えながら、様々な状況や新たな課題に対応する力が求められる。また、ともすればシステム中心（System-Centered）になりがちな学校運営に、「本人中心の計画（Person-Centered Planning）」の考え方を根付かせていくには、教員が、自身の子ども観、障害観、教育観について自ら見つめなおすことが必須になってくると思われる。これは、先の論文でいうところの「深化型の専門性」にあたる。

この情報パッケージのコンセプトとしては、単に情報や知識を提供する「障害に対応し

たマニュアル」ではなく、教員に基本情報や考え方を提供したうえで「考えることをサポートする、あるいは促すツール」とする工夫が必要である、と考えた。

（４）子どもに関わる関係者が「共有できるツール」を目指すことの意義

「実態把握・目標と指導内容の設定・評価と指導・支援の改善」という一連の教育活動は、一人の教員で行うわけではない。学級、学年、学部、学校全体といった、チームでの取組が基本となる。しかしながら、多くの学校現場では、転勤等で教員の入れ替わりがあったり、若い教員や重い障害のある子どもを担当したことの少ない教員が増えていたり、という厳しい現状がある。ベテランの教員から「経験の浅い教員にどのように専門性を伝えていけばよいかわからない。」という声も多かった。紀要論文「重複障害教育に携わる教員の専門性のあり方とその形成に関する一考察—複数の異なる障害種別学校を経験した教員へのインタビューを通して—」（齊藤他、2013）では、インタビューの対象となった教員（重複障害教育の専門性が高く、かつ現在指導的な立場にある教員）の全てが、「実践知を教員間で育み共有する学校組織の在り方」を模索していた。

そこで、この情報パッケージの役割の一つとして、ベテランの教員が何気なく実践していると思われる内容について、「見える化」し、周りの教員と共有できる形にすることが重要である、と考えた。情報パッケージは、子どもの実際の教育計画の作成・実施・評価に具体的に役立つものであるが、一方で、チームで共通理解を図ったり、経験の少ない教員の研修に用いたりする等、様々な活用の仕方が考えられる。また、保護者、様々な領域の専門家との連携や協働を促すツールともなる。学校内外で「共有できるツール」となることを目指したい。例えば、個別の研修によって「一人の教員の専門性が1メートル高くなる」のではなく、情報パッケージに書かれた内容や考え方をチームで共有することによって「チームのすべての教員の専門性がみんな10 cm 高くなる」ことを目指せるようなツールとしたい。「共有できるツール」としての具体的な活用の方法については、研究協力校の力を借りて、学校現場目線からの提案を期待することとした。

次ページに、教育計画（個別の教育支援計画、個別の指導計画）の立案と実施にかかる現状の課題（図1）と、情報パッケージ活用後に期待される状況（図2）のイメージ図を示す。

現状（図1）においては、「手厚い支援を必要としている子ども」について、各学校で学習指導要領に基づいて個別の教育支援計画や指導計画が作成され、計画に基づく指導や支援が行われている。しかしながら、重複障害教育に関する知見、ICFの活用、キャリア教育の視点等、様々な知見や考え方が断片的に導入されているため、実態把握の視点がまちまちだったり、担当者によって指導内容や方法が変わったり、学習内容が家庭や地域での生活と結びついていなかったり、卒業時のゴール設定が曖昧だったりするなど、多くの課題がある。

情報パッケージを活用する状況（図2）では、様々な知見や考え方が「本人（家族）中心の計画」という考え方に基づいて整理されている。キャリア教育やICFの活用についても、断片的な提案ではなく、その重要なエッセンスが包括的に情報パッケージに盛り込まれている。さらに、情報パッケージの軸となる「本人（家族）中心の計画」の考え方が、学習指導要領に書かれている文言とどのように連動しているかが整理され提示されていることによって、情報パッケージは学校現場でより受け入れやすいものとなっている。

このように設計された情報パッケージを、教員がチームとして活用することによって、手厚い支援を必要としている子どもに対して、現在、及び将来を支える個別の教育支援計画や個別の指導計画が立案され、実施されることになる。子どもの入学時から卒業後まで一貫して計画的に行われる教育活動によって、手厚い支援を必要としている子どもの自立と社会参加の充実が図られることが期待される。

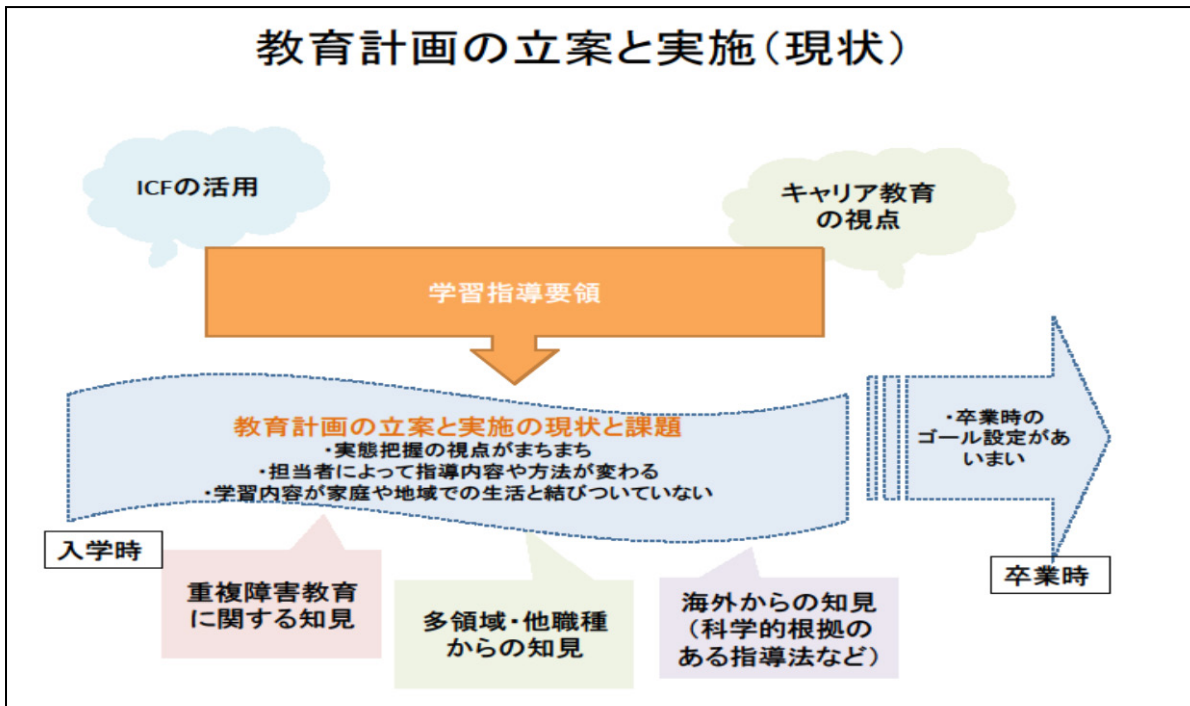


図1. 教育計画の立案と実施にかかる現状と課題のイメージ

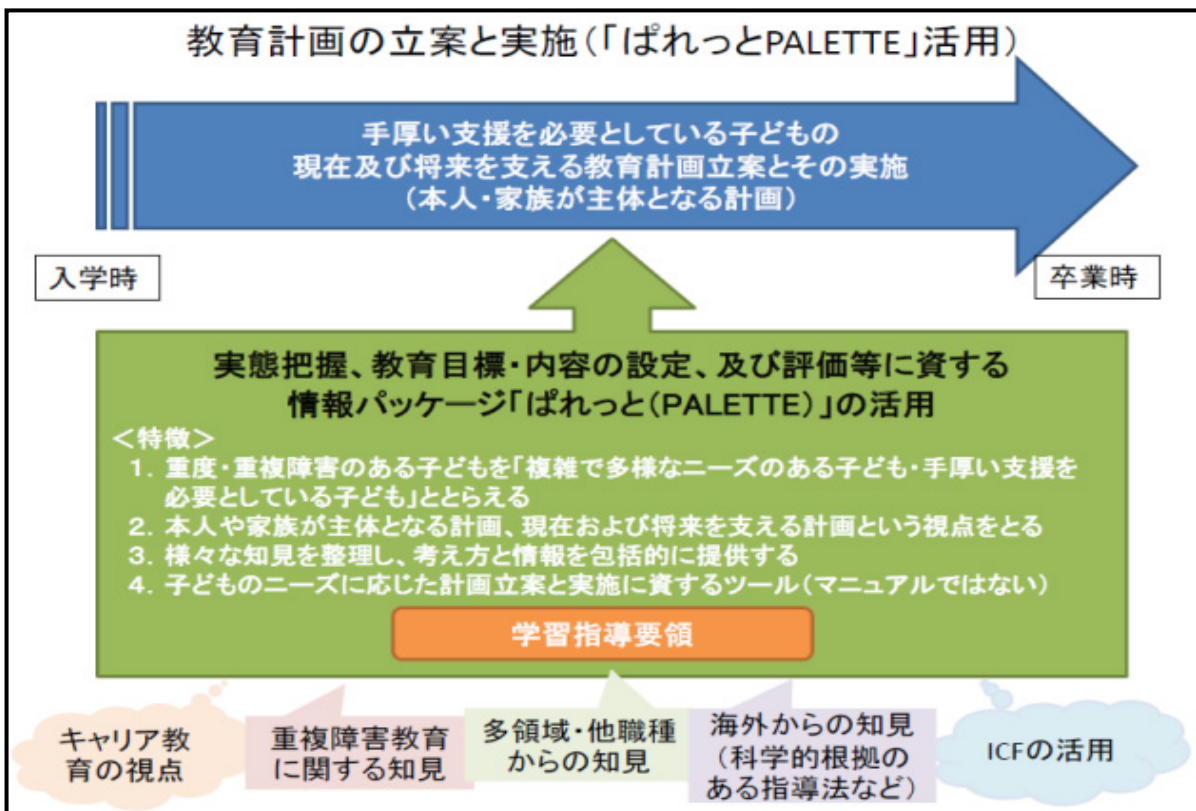


図2. 情報パッケージを活用した際の教育計画の立案と実施のイメージ

2. 情報パッケージ（試案）の作成

- (1) 情報パッケージの項目と構成
- (2) 情報パッケージのコンセプトと通称
- (3) 情報パッケージのフォーマットの検討
- (4) 情報パッケージの解説及び資料に盛り込むべき内容

(1) 情報パッケージの項目と構成

この研究で開発を目指す情報パッケージは、手厚い支援を必要としている子どもの個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と実施（実態把握、目標設定、実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善等）に必要な情報や知見について、「本人中心の計画 Person-Centered Planning」の考え方を軸にして整理し、提供するものである。

情報パッケージの項目案は以下の手順で作成され、検討を繰り返しながら、数回の改訂を行って決定した。

- ① 学校現場の現状の課題分析より、重度・重複障害のある子どもを担当する教員の顕在的・潜在的なニーズについて、研究チームで議論を行った。
- ② 上記の教員のニーズに応えるための内容を意識しつつ、文献情報の整理等を、並行して行い、「本人中心の計画 (Person-Centered Planning)」の考え方を軸にししながら、原案を作成した。
- ③ 平成 25 年度の第 1 回研究協議会において、項目案を検討し、参加者の意見を反映した。
- ④ 研究分担者、研究協力者、研究協力機関の中で項目を分担して、それぞれの項目についてプロットの作成を行った。
- ⑤ 平成 25 年の第 2 回研究協議会において、作成されたプロットを共有し、内容の検討を行った。そのうえで、新たに付け加えるべき項目、統合する項目などについて検討した。また、項目ごとのまとまりと見出し（実態把握、保護者との連携・専門職者との連携、目標設定と教育内容、学習活動の展開、評価と計画の見直し）と構成（まとまり見出しの説明、項目の順番）について改訂を行った。
- ⑥ 項目を並列でなく、図で表現することで、Plan、Do、Check、Action のサイクルを意識できるように工夫した。

次ページに、最終的に情報パッケージ（試案）に掲載した項目と構成を示す。

情報パッケージの各項目と構成

I. 実態把握

- (手厚い支援を必要としている子どもの)実態把握
1. 発達検査の活用とその意味
 2. 一日の生活の流れのアセスメント
 3. 子どもの生活マップ
 4. 生活場面におけるコミュニケーション活用の状況
 5. 感覚障害(視覚)がある場合の行動観察の視点
 6. 感覚障害(聴覚)がある場合の行動観察の観点
 7. 諸感覚の活用に関するアセスメント
 8. 環境面のアセスメント
 9. 子どもの興味関心のアセスメント

II. 保護者との連携・専門職との連携

- (手厚い支援を必要としている子どもの)保護者との連携・専門職との連携
1. 保護者の理解と本人受容の視点
 2. 家族のエンパワメント
 3. 専門職との連携の視点
 4. 医師との連携の視点

III. 目標設定と教育内容

- (手厚い支援を必要としている子どもの)目標設定と教育内容
1. 目標設定の仕方
 2. 子ども(家族)が望む未来の実現のための目標設定と教育内容
 3. 小中高のライフステージを意識した目標設定と教育内容
 4. 体調が変動しやすい場合の目標設定と教育内容
 5. 反応が読み取りにくい子どもとのコミュニケーションの視点と教育内容
 6. 子どもの自己決定の力を育む目標設定と教育内容
 7. 教科学習の視点と教育内容

V. 評価と計画の見直し

- (手厚い支援を必要としている子どもの)評価と計画の見直し
1. 目標達成が難しい際の振り返りの視点
 2. 個別の指導計画の見直し
 3. 個別の教育支援計画の見直し

IV. 学習活動の展開

- (手厚い支援を必要としている子どもの)学習活動の展開
1. 一日を通した個別目標への取り組み
 2. 個別学習と集団学習の考え方
 3. 課題が異なる子どもたちが参加する集団学習活動の組み立て方
 4. 交流及び共同学習場面における活動の展開
 5. 地域資源を活用した学習活動の展開

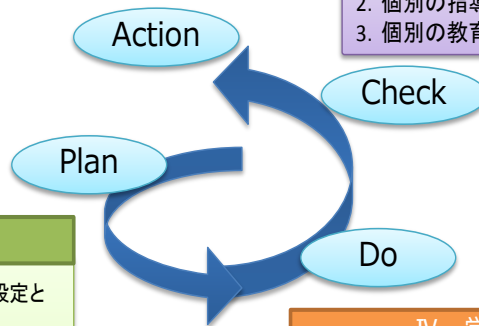


図1. 情報パッケージの各項目と構成 (試案版)

(2) 情報パッケージのコンセプトと通称

情報パッケージをより広く普及するために、親しみやすい、コンセプトを表現した通称を設定した。以下は、情報パッケージ（試案）に掲載した通称の紹介文である。

「重度・重複障害のある子どもの実態把握、教育目標・内容の設定、及び評価等に資する情報パッケージ」の通称は、「ぱれっと (PALETTE)」です。

「ぱれっと (PALETTE)」

P Plan and
A Action tools for
L Living and learning of
E Every child's
T Today and
T Tomorrow through
E Education



パレットには、子どもたち一人一人が、お気に入りの色を選んで、思い思いの将来の夢を描くことを実現するツールとなるイメージがあります。

フランス語のパレットの説明によると、「パレットに出した有限の色を複数組み合わせることで、すべての色を作り出すことができる」という意味があるそうです。

教育領域における「パーソンセンタープランニング」には様々な難しい課題もありますが、限られた資源や制約のある仕組みの中で、子どもや保護者を含むチームが知恵を絞ってできることを組み合わせることで、子どものニーズに応える色を作り出すことができるのではないのでしょうか。

この「ぱれっと (PALETTE)」を用いることで、子どもと保護者が思い思いの絵を描くことを実現するお手伝いができるといいな、という願いを込めています。

(3) 情報パッケージのフォーマット

情報パッケージのフォーマットについては、活用のしやすさを検討した結果、以下のような設定で作成することとなった。

- ① 5 領域 28 項目の各項目について、インデックスの付いたファイルにして、基本的な情報をコンパクトに整理し（6～8 ページ）、取り出して使いやすいものにする。
- ② 情報パッケージ全体において、手厚い支援を必要としている子どもたちについて、タイプの異なる 4 名を、仮に設定しておく。項目の初めに、その中の子ども 1 名（または複数名）について教員が対応に困っている状況やエピソードを事例として提示する。
- ② 解決のための基本的な考え方や基本的な情報を示す。
- ③ 具体的に実践に活用できるツールやポイントを示す。
- ④ ②で提示した事例について、ツールやポイントを使って課題解決したエピソードを示す。
- ⑤ もっと情報が欲しい人のために、情報ソース（文献、ウェブサイト等）を載せる。

以下の図は、情報パッケージに登場するタイプの異なる 4 人の子どもの紹介である。



図 1. 情報パッケージに登場する 4 人の子どもの紹介

(4) 情報パッケージの解説及び資料に盛り込むべき内容

情報パッケージを活用する教員に、作成にあたって研究チームで検討した情報パッケージの意義を伝え、その理解を促し、活用しやすくするために、解説及び資料を記載することにした。

解説には、以下の内容を記載した。

- ・教育計画の立案と基本的な考え方
- ・手厚い支援を必要としている子どもの教育の目的をどのように捉えるか
- ・情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」の活用によって期待されること
- ・情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」の各項目と構成について

特に、「教育計画と立案の基本的な考え方」については、日本の教育現場において「本人中心の計画 (Person-Centered Planning)」の考え方を紹介する重要な部分である。以下の7つの事項について、手厚い支援を必要としている子どもの状況に即して解説を行っている。

- 1) 子どもの生活の質の向上を目指したものであり、学校の中だけに限定するのではなく、子どもの家庭や地域での生活の質を向上させ自立し社会参加を目指すことが最終的な目的である。
- 2) 子どもの自己決定の力を育てることを重視する。
- 3) 子どもの障害ではなく、子どもの持つ能力や強み、またその力を出すために必要な支援に焦点をあてる。
- 4) 子どもと家族の現在の生活、将来の生活を視野に入れる。
- 5) 子ども（家族）が望む未来の実現のための目標を含む。
- 6) 様々な専門職（教員を含む）は、上記の目標の実現を目指して連携をする。
- 7) 子どもや家族が中心となる計画であり、教育や学校のシステムはその計画実現を支えるシステムとなるよう進化を続ける。

さらに、巻末の資料として、「基本的な考え方」として述べられたこの7つの項目で述べた内容と、特別支援学校学習指導要領との関係を解説した。この資料の作成については、研究協力者である文部科学省の分藤特別支援教育調査官に依頼し、協力を得た。

3. 情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案)

資料2 (別冊) をご参照ください